

大学院コンサートシリーズ・名手と共に

「青柳晋氏を迎えて」交流演奏会

with東京藝術大学

洗足院1 見原さやか

ヤナーチェク

ピアノ・ソナタ 「1905年10月1日の街角で」変ホ短調

洗足院1 船越のどか

マリオ・カステルヌオーヴォ・テデスコ

ピアノソナタ作品51より第2楽章・第3楽章

ヨハン・エーリク・コラー(藝大 エストニア研究生)

ベートーヴェン

ピアノソナタ第24番嬰へ長調

藝大院4 加藤 真帆

スクリャーピン

ピアノ・ソナタ第4番嬰へ長調

青柳 晋 ベートーヴェン

ピアノ・ソナタ第29番変ロ長調

「ハンマークラヴィア」

2021年11月7日(日)

14時開演(13:30開場)

シルバーマウンテン 2階

△ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

== PROGRAM ==

ヨハン・エーリク・コラー（藝大 エストニア研究生）

L.v.ベートーヴェン／ピアノソナタ第24番嬰へ長調

見原 さやか（洗足 院1）

L.ヤナーチェク／ピアノ・ソナタ「1905年10月1日の街角で」変ホ短調

船越 のどか（洗足 院1）

マリオ・カステルヌオーヴォ＝テデスコ／ピアノソナタ作品51より第2楽章・第3楽章

加藤 真帆（藝大 院4）

A.スクリャービン／ピアノ・ソナタ第4番嬰へ長調

～ 休憩 ～

青柳 晋

L.v.ベートーヴェン／ピアノ・ソナタ第29番変ロ長調

「ハンマークラヴィーア」

■ Program Note

■ L.v.ベートーヴェン／ピアノソナタ第24番嬰へ長調

ベートーヴェンのソナタ第25番嬰へ長調は、テレーズ・フォン・ブランズウィック伯爵夫人に捧げられたもので、「à Thérèse」の愛称で親しまれている。この曲には2つの楽章で構成されており、第1楽章はソナタ形式で、第2楽章はロンドの一種である。カール・ツェルニーによれば、「à Thérèse」と「アパッショナータ」はベートーヴェンのお気に入りのソナタだったという。

ヨハン・エーリク・コラー（藝大 エストニア研究生）

■ L.ヤナーチェク／ピアノ・ソナタ「1905年10月1日の街角で」変ホ短調

ヤナーチェクはチェコ出身の作曲家。モラヴィア地方の民族音楽研究から生み出された、発話旋律または旋律曲線と呼ばれる旋律を着想の材料とし、オペラを始め、管弦楽曲、室内楽曲、ピアノ曲、合唱曲に多くの作品を残した。今回解説するのは、ヤナーチェクが遺した唯一のピアノ・ソナタである。1918年の祖国独立を頂点とする民族復興運動の機運が高まる中、作曲者が目の当たりにした悲劇を題材として書き上げた作品である。

〈予感〉と〈死〉の二つの楽章からなる。〈予感〉は旋律に被せられるオスティナートが次第に侵食し、ドラマティックな展開を見せる。続く〈死〉ではそのオスティナートが全体を貫く単一のモチーフとなり、吊いの鐘のような様相を感じさせる。オスティナートとは「頑固や、執拗な」を意味するイタリア語で、音楽ではある特定の楽句のパターンを繰り返すというものだ。

作曲当初は3楽章からなる予定だったが、第2楽章の標題が「悲歌」から「死」に変更されたほか、初演直前に最終楽章が焼き捨てられている。ヤナーチェクはその初演にも満足を感じることはなく、自筆譜をモルダウ川に投げ捨ててしまった。しかし幸運にも初演で演奏したピアニストがそのコピーを所持していたために現在に至っている。作曲家から出版の許可が下りたのは初演から18年後のことであった。

見原 さやか (洗足 院1)

■マリオ・カステルヌオーヴォ＝テデスコ／ピアノソナタ作品51 より第2楽章・第3楽章

イタリア近代の作曲家・カステルヌオーヴォ＝テデスコは、クラシックギター曲や映画音楽で名前を耳にする事が多い作曲家だが、作曲のジャンルは多岐に渡っており、管弦楽曲や室内楽曲、オペラ、そして数多くのピアノ曲を作曲している。彼はフィレンツェにて、イタリア系ユダヤ人の家庭に生まれ、作曲をピツェッティに師事しており、師のイタリア新古典主義音楽の思想を受け継いでいる。しかし、作風として新古典主義と断ずる一方、印象主義的な和声感や、国民楽派的な旋律を彷彿とさせる音形が垣間見えることがあり、そこが彼の特徴である。また、当時の流行に寄せた作品が多い。

本日演奏するピアノソナタ Op.51 も流行に影響を受けたと思われる場面が多く存在する。彼の作品の特徴でもあるが、テーマやモチーフをあまり変化させず使用する事が多く、本作品も例に漏れず同じ音形が何度も繰り返される。

第2楽章はゆったりとしたテンポで進む曲であるが、ブルースと表記される部分が二箇所あり、2楽章全体に付点のリズムが散りばめられている。

第3楽章は、4度音程の連なりで始まり、解決しない不安や緊張感が高まる音楽になっている。形式としてはロンド形式で、冒頭の旋律が形を変えながら何度も繰り返される。拍子が短いスパンで変化していき、フレーズもどこまでか分かりにくいいため、緊張が続くが、最後は全てをまとめるように、今まで出てきたモチーフを再登場させながら華やかに終わりへと向かう。

船越 のどか (洗足 院1)

■A.スクリャービン／ピアノ・ソナタ第4番嬰へ長調

ピアノソナタ4番 嬰へ長調 作品30は、スクリャービンが1903年に完成させた。

緩やかな第1楽章と急速な第2楽章からなり、とりわけ第1楽章の神秘的な響きと調性の曖昧さから、スクリャービン中期の幕開けの作品と考えられている。

第1楽章(Andante)は、実質的な序奏とも考えられる。天上的な静けさからはじまり、気怠げなモチーフがつづく。後年にスクリャービンが付した詩によると、これらは星々の輝きであることがわかる。

続けて切れ目なく演奏される第2楽章(Prestissimo, volando 至って急速に、飛ぶように)は、第1楽章とは対照的に、躍動感あふれるモチーフで始まり、祝祭的な雰囲気を持つ。単主題的なソナタ形式またはロンドン・ソナタ形式で作曲されている。コーダにおいて、第1楽章のテーマが熱烈なクライマックスとなって回想される。ここで前述の詩が示唆しているのは、かつて希求していた遠くの星々が、「飛翔」によって辿り着いた先で「燃ゆる太陽」となり、光の海になるその様子である。

加藤 真帆 (藝大 院4)

■L.v.ベートーヴェン／ピアノ・ソナタ第 29 番変ロ長調 「ハンマークラヴィーア」

32 曲あるベートーヴェンのピアノソナタの中で、10 曲もある 4 楽章制のソナタの作品の中でも、最高傑作であり、最も長大な規模で書かれたこの曲は「ハンマークラヴィーア」と名付けられた。

そもそもハンマークラヴィーアとは、19 世紀に入り改良を重ね、現代ピアノの構造に近づいたピアノのことである。その表現の可能性に魅せられたベートーヴェンは、複雑な技巧と新たな音域を試しつつ、楽器の可能性を追求していった。

このソナタは、イギリスのブロードウッド製のピアノとウィーンのアダム・シュトライトナー製の両方を用いて作曲された。このソナタだけに限らず、ピアノの改良と共に作品の表現内容も変化するという意味で、ベートーヴェンとピアノの進化、メーカーの特徴は非常に密接な関係であったのである。

第 1 楽章は華やかな和音で幕を開け、大ソナタにふさわしい力強いこのモチーフは曲中何度も登場する。優しい旋律の第 2 主題、そしてフーガも現れて賑やかに、そして表情豊かに展開していく。

第 2 楽章は短いスケルツォで、軽快なテンポで歯切れよく進んでいく。途中短調のトリオを挟み、さらに軽快さを増しあつという間に終わりを迎える。

第 3 楽章 長大のアダージョで、神との語りであると言われる楽章である。

この曲は「全世界のすべての苦悩の霊廟」(ヴィルヘルム・フォン・レンツ)とたとえられていることでも有名である。演奏する者にとっては、大きな静寂をもって全てを包み込む神に畏怖の念を抱きつつも、自身はもがき苦しむことにこそ共感する生きた人間であるがゆえに、最も想像力と忍耐が要求される作品と言える。

第 4 楽章は 3 楽章の静寂さを引きずりつつ、人間的な起伏に富んだ導入で始まる。三声のフーガが始まるとノンストップでめまぐるしく展開していき、自由なフーガとして書かれているが、ピアノ曲とは思えない複雑さで、当時は、演奏は物理的に困難を極めていたと言われていた。激しさを増し佳境に入ったフーガはいったん途切れ、一瞬の沈黙の後、非常に美しいメロディが天から降りてきて、その後は一気に盛大なクライマックスへと突き進んでいく。まさに、複雑な建造物の中を延々と進み続けたのち、最後に探し求めた大聖堂にたどり着いたような感動を覚えるフィナーレとなっている。

青柳 晋

■Profile

ヨハン・エーリック・コラー (藝大 エストニア研究生)

エストニア出身、5 歳からピアノを始める。

エストニア音楽アカデミー、リスト音楽院を卒業。

現在、東京藝術大学研究生に在籍。

見原 さやか (洗足 院 1)

東京都出身、8 歳からピアノを始める。

都立総合芸術高等学校を卒業後、洗足学園音楽大学音楽学部に入學。

現在、ピアノを飯野明日香、山岸真由美、室内楽を新居由佳梨に師事。

船越 のどか (洗足 院 1)

都立総合芸術高等学校音楽科卒業。洗足学園音楽大学卒業後、同大学院に進学。

ピアノを其田富子、井上祐子、川辺千香子、碓井俊樹、梶木良子の各氏に、ソルフェージュを 上田真樹氏に師事するとともに、飛騨高山音楽祭他、様々な音楽セミナーにてマスタークラスを受講。ソロだけでなく声楽や器楽の伴奏も行なっている。

加藤 真帆 (藝大 院 4)

愛知県名古屋市出身。

第 9 回ショパン国際ピアノコンクール in Asia アジア大会中学生部門銀賞。第 65 回全日本学生音楽コンクール高校の部名古屋大会第 3 位。第 27 回宝塚ベガ音楽コンクール第 3 位。

これまでに、ピアノを森珠美、後藤康孝、今野尚美、高石香、加藤美緒子、青柳晋、ベルント・グレンザーの各氏に師事。第 39 回霧島国際音楽祭にて、エリソ・ヴィルサラゼ氏のマスタークラスを受講。平成 30 年度より、山田貞夫音楽財団奨学生。

東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。同大学院音楽研究科修士課程に進学後、ヴェルツブルク音楽大学(ドイツ)に留学、修士課程を最高得点で修了。現在、東京藝術大学大学院修士課程 4 年。

青柳 晋

ニカラグア生まれ、米国で 5 歳よりピアノを始める。日本に帰国後、全日本学生音楽コンクール全国大会で 1 位受賞。桐朋学園大学在学中に西日本音楽賞を受賞し、ベルリン芸術大学に留学。1992 年ロン・ティボー国際コンクールに入賞後、パリ日本大使館、ラジオ・フランス、旧西・東ドイツ各地からアメリカに至るまで各地で演奏活動を展開。ハエン、アルフレード・カゼッラ、ポリノーの各国際ピアノコンクールで 1 位受賞。1997 年頃より日本でも演奏活動を開始し、2000 年には青山音楽賞を受賞。第 28 回日本ショパン協会賞受賞。これまでに 7 枚のソロアルバムをリリースし、いずれも高い評価を受けている。2006 年よりリスト作品をメインに据えた自主企画リサイタルシリーズ「リストのいる部屋」をスタートさせ、今年は 15 回目を迎える。国内外のオーケストラとも数多く共演し、著名アーティストからの信頼も厚く、近年は室内楽奏者としても活躍の場を広げている。2012 年 3 月カーネギーホール・ワイルリサイタルホールでデビュー公演、現地メディアで絶賛を博す。コンクール審査員としても経験を重ね、日本音楽コンクール、東京音楽コンクール、ハエン国際コンクール審査員などを歴任し、高松国際ピアノコンクールでは第 1 回目から審査に参加、現在副審査委員長として同コンクールのプロデュースにも携わる。東京都交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、九州交響楽団など全国の主要オーケストラと協演。これまでに宇賀田克子、藤村佑子、山田富士子、山田康子、ジョー・ポートライト、リリー・クラウス、クラウス・ヘルヴィヒ、パスカル・ドゥワイヨンに師事。東京藝術大学教授、洗足学園大学客員教授、札幌大谷大学客員教授、長崎おぢか国際音楽祭音楽監督を務めながら幅広く演奏活動を継続中。

オフィシャル・ウェブサイト <http://www.susumuaoyagi.com/>